

平成20年度 大学振興会研究奨励補助金報告書

1. 研究課題名

伝統書における現代性

所属学部：文化情報学部 職名：教授 研究代表者氏名：鄭麗芸 

3. 研究成果の概要 (1, 200字程度で記入。)

悠久の歴史を持つ書は、現代に至り、パソコン、インターネット、携帯電話などの急激な普及の中、どのように伝統を継承しながら現代に生きるのでしょうか。これは今日書道界で最も現実的で緊迫した課題となっています。したがって、今こそが書の持つ芸術性と造形美を再認識し、その中から現代に生きる芸術的要素を見出し、伝統と融合した現代書の魅力を考察しなければなりません。本研究はこの主旨に従って、筆者がかつて交流したことがある中国の代表的な現代書家の代表作を具体的に取り上げ、作品に見られる優れた芸術的表現力を分析しながら、その書家たちの生い立ちをたどってみます。そして、これらの現代書家の群像から現代書の魅力を感受し、その現代性だけではなく未来性にも踏み込んでみたいと考えます。

古来、文人は雅集によって、詩を吟じ、揮毫するなど、情趣あふれる作品を作りました。千古佳作と称される「蘭亭序」はまさにその典型的な作品です。これは東晋の永和九年（西暦353年）旧暦3月3日、王羲之（303-361）が四十一名の文人と紹興の蘭亭で詠った詩集に書いた序文です。文中に蘭亭の美しい山水を描写し、人生の無常観を吐露するなど、優れた内容に止まらず、文人の優雅な気品を存分に漂わせた書風も洒脱雄渾な境地に達しました。この千変万化を遂げた三百二十四字の「蘭亭序」の書風は、歴代書家の必修手本となり、王羲之は書道史に揺るぎのない“書聖”の地位を確立しました。千六百年来、書家たちは大量の臨書作品を残しただけではなく、それに寄せた文人情趣もますます高まってきました。蘭亭伝統を継承することは、すでに書壇の共通理念となりました。

1983年4月15日（旧暦3月3日）は「蘭亭序」の誕生1630年記念日であるため、中国書法家協会、浙江分会、蘭亭書会は書道の聖地「蘭亭」で盛大な「記念王羲之《蘭亭序》一千六百三十周年大会」を開催しました。同時に「蘭亭序の版本陳列」、「当代百家による蘭亭序臨書作品」と「千人の書展」なども併催、蘭亭史における最大な盛会となりました。この盛況をもたらした空前の大会に、幸運にも私も列席でき、現代の一流文人の雅集による書香を漂わせた雰囲気を感じられ、大きな教益と

激励を受けました。大会の後、有名な書画家、93歳の沈邁士先生が私に自作詩〈海曙楼詩詞草〉をくださいました。

この貴重な墨宝の前半は絶句二首で、主に蘭亭大会の盛況を描写し、未来の書壇を展望する鴻志を、そして現代文人の心情を詠っています。後半は「点絳唇・紹興東湖」詞で、大会後、名勝東湖を遊覧した風景と文人の気品を詠っています。

「蘭亭序」には表現されていなかった積極的な人生観も吐露したことで、「人書俱老」の芸術境地に至っています。これこそが、創意的な創作による蘭亭の精神を継承した芸術の結晶と言えるでしょう。

(本研究の成果の一部は、「修禊蘭亭伝韻事・於今山水有清音」として(『唱山女学園大学大学研究論集』第41号、平成21年3月)に掲載される。)